

野崎家コレクションの中国書画にみる近代の交流

古川 文子*

目次

はじめに

1. 清末書画人の来訪
2. 旧蔵者からの寄贈
3. 羅振玉収蔵品の購入

おわりに

はじめに

江戸時代の後期、岡山県南部の瀬戸内海沿岸において、大規模な塩田開発による製塩業に成功した野崎武左衛門（1789－1864）は「日本の塩田王」と称された。実業家としての手腕に加え、備中松山藩の財政改革に貢献した陽明学者の山田方谷、点茶の速水流宗匠らと交流し、和歌や書画に親しんだ教養人としても知られている。その後継者である孫の武吉郎（1848－1925）は、武左衛門の死去した翌年の慶応元年（1865）に17歳で家督を相続し、祖父の遺訓¹を守って家業を発展させた。明治期の塩業が直面した塩の輸出入の問題に対し、いち早く清国市場への輸出を請願、政府の市場調査を促進し、朝鮮市場への進出にも貢献した。日清戦争後の明治32年（1899）には、台湾での塩田開発にも着手している。また、明治23年（1890）の第一回帝国議会から16年間にわたり貴族院議員を務め、貴族院議長の前衛篤麿や、岡山県出身の犬養毅、二松学舎を創設した漢学者の三島中洲らと親交があった。幅広い見識と人脈をもって、社会貢献を積極的に行い、文芸や学問を奨励するとともに、優れた人材に対する援助を惜しかなかった²。

野崎家に伝わる文物の収蔵・展示を行う野崎家塩業歴史館は、岡山県倉敷市児島味野に位置し、公益財団法人竜王会館により運営されている。重要文化財に指定されている旧野崎家住宅の一般公

* 岡山県立美術館・学芸員（岡山県新進美術家育成「I氏賞」事務局担当）

¹ 「松寿院野崎翁遺訓」は七箇条の「申置」からなる。第三条「無益と思ふわざには、つとめて金銭を費やさざるやう心懸くべし、公共の利益あることにはいさゝかも吝むべからず」には、野崎家コレクション形成にも関わる武左衛門の理念が示されている。（『備前児島野崎家の研究－ナイカイ塩業株式会社成立史－』参照）

² トルストイ作品の翻訳で知られる神学者の小西増太郎、洋画家の原撫松（ともに現在の岡山市出身）らを援助した。

開、収蔵品の企画展示、「塩づくり体験」などの普及活動を通して、この地を拠点に発展した野崎家と塩業の歴史をわかりやすく紹介している。収蔵資料は一万数千件にも及び、江戸時代からの日記・塩業関係文書（約八千件）等の記録資料も大変貴重である。そのうち、書画・陶磁器・漆器・金工品などの美術工芸品は約五千件で、享保雛・古今雛などの雛道具も数多く伝わる。

岡山県立美術館では、県下の優れたコレクションを紹介する企画「おかやまアートコレクション探訪」において、平成24年（2012）、25年（2013）の二回にわたり、野崎家塩業歴史館の収蔵品による特別企画展を開催し、合計277件もの作品をご出品いただいた³。



図1 特別企画展の案内パンフレット

ここで紹介する内容は、上記の展覧会準備に関わる調査に続き、野崎家塩業歴史館が毎年制作する館蔵品紹介カレンダーの編集、データベース整備のための調査・撮影等に参加させていただいた際の情報をもとに作成した。

先ず、平成27年（2015）に岡山大学で開催されたシンポジウム「近代の岡山と東アジア」⁴に際し、野崎家塩業歴史館に伝わる明時代から中華民国時代の中国書画のうち、掛軸64件の基礎データを表1に整理した。

³ 「おかやまアートコレクション探訪Ⅳ 野崎家コレクション」（2012年2月24日－4月8日）、「おかやまアートコレクション探訪Ⅴ 野崎家コレクションⅡ－個性集う地方サロンー」（2013年3月5日－4月7日）

⁴ 岡山大学大学院社会科学部 東アジア国際協力・教育研究センターシンポジウム「近代の岡山と東アジア－塩・人・書画－」（2015年2月12日）岡山県出身の新聞人、実業家で、上海に「楽善堂」支店を開き滞在した岸田吟香（1833－1905）と、塩業を基盤に東アジアに拡がる文化交流の結節点となった野崎家をテーマに岡山大学創立50周年記念館で開催された。（『文化共生学研究』第15号で特集）

表1 野崎家塩業歴史館収蔵 中国書画目録(掛軸)

No.	作者	作品名	時代	頁数	形状	法量	収蔵番号	備考
1	(伝)夏珪	春景山水図	明	1幅	絹本墨画淡彩	131.7 × 71.8	157	②
2	(伝)周之冕	花鳥図	明	1幅	絹本着色	127.5 × 68.8	D203	
3	(作者不詳)	花鳥図	明	1幅	絹本着色	115.3 × 51.1	L046	
4	董其昌	仿高尚書夏雲図	明	1幅	紙本墨画	60.5 × 42.1	甲083	
5	文震孟	書 題趙子昂群仙図七絶	明	1幅	絹本墨書	154.8 × 43.6	甲070	田辺
6	陳希尹	書 詠鶴七律	明	1幅	紙本墨書	144.0 × 78.3	80	
7	魯得之	墨竹図	清 順治6年(1649)	1幅	紙本墨書	233.0 × 57.0	D552	
8	蔡方炳	虎丘山図記	清	2幅	金箋墨書	207.5 × 47.1	288	
	許培		清 康熙7年(1668)		金箋墨画淡彩	204.1 × 47.8		
9	龔賢	水墨山水図	清 康熙9年(1670)	1幅	絹本墨画	174.6 × 49.2	甲078	
10	高其佩	指頭画山水図	清 康熙52年(1713)	1幅	絹本墨画淡彩	191.3 × 82.0	258	
11	陳農	設色人物図	清	1幅	絹本着色	48.1 × 33.8	A054	
12	沈德潜	書 寿詩	清 乾隆16年(1751)頃	1幅	金箋墨書	209.7 × 52.3	53	
13	沈南蘋	設色萱草図	清	1幅	紙本着色	95.0 × 31.0	52	
14	伊孚九	扇面山水図	清	1幅	紙本墨画	20.3 × 57.6	3	
15	費漢源	老松図	清 乾隆46年(1781)	1幅	紙本墨画	93.2 × 45.6	372	
16	戴礼	花卉図	清	1幅	紙本墨画淡彩	178.2 × 86.6	397	②
17	周笠	花卉図	清 嘉慶15年(1810)	2幅	絹本着色	(各)128.5 × 40.6	362	
18	張秋穀	四季花卉図	清 嘉慶19年(1814)	4幅	紙本着色	(各)129.4 × 30.8	D431	
19	方西園	梅花喜鵲図	清	1幅	紙本墨画	136.6 × 30.4	さ133	
20	曾朝漢	水墨竹石図	清	1幅	紙本墨画	64.9 × 129.9	184	
21	林則徐	書 文賦	清	1幅	紙本墨書	174.0 × 46.0	103	白岩
22	楊光暉	山水図	清 光緒5年(1879)	1幅	紙本墨画淡彩	172.6 × 91.2	D519	
23	郭少泉	書画(遊仙詩七絶/蘭竹石小贊)	清 光緒7年(1881)	2幅	絹本墨書/墨画	(各)129.5 × 34.3	さ130	
24	王冶梅	墨石図(陳曼寿 贊)	清 光緒7年(1881)	1幅	絹本墨画	134.3 × 50.7	110	
25	王冶梅	東山雨霽図	清 光緒7年(1881)	1幅	絹本墨画	178.7 × 52.1	さ135	
26	王冶梅	盆花果実図	清 光緒9年(1883)	1幅	絹本着色	34.7 × 47.1	111	①
27	王冶梅	桃花遊魚図	清 光緒9年(1883)	1幅	絹本着色	143.2 × 40.1	112	①
28	王冶梅	山水図	清 光緒9年(1883)	1幅	金箋墨画	24.5 × 17.4	113	
29	王冶梅	古仏一尊図	清 光緒9年(1883)	1幅	絹本墨画	40.3 × 17.6	115	①
30	王冶梅	書 登扇嶺七絶	清 光緒9年(1883)	1幅	絹本墨書	26.0 × 18.2	116	①
31	王冶梅	水仙図	清 光緒9年(1883)	1幅	絹本墨画淡彩	25.5 × 17.4	119	①

32	王冶梅	書 贈龍王山房主人七絶	清	光緒9年(1883)	1幅	紙本墨書	33.8 × 51.0	120	①
33	王冶梅	四季山水図	清	光緒9年(1883)	12幅	紙本着色	(各)146.5 × 52.0	417	①
34	王冶梅	煎茶図	清	光緒9年(1883)	1幅	紙本墨画淡彩	34.7 × 46.8	D553	①
35	王冶梅	年々有餘図	清	光緒9年(1883)	1幅	紙本墨画淡彩	137.7 × 33.8	D554	①
36	王冶梅	円窓書画(仿古青緑山水図)	清	光緒10年(1884)	1幅	絹本墨書/着色	(各)28.3 × 29.0	121	
37	王冶梅	円窓書画(疎林孤亭図)	清	光緒10年(1884)	1幅	絹本墨書/着色	(各)28.4 × 29.1	乙122	
38	王冶梅	墨蓮図	清		1幅	紙本墨画	135.9 × 32.8	114	
39	王冶梅	墨蘭図	清		1幅	紙本墨画	137.9 × 34.3	D085	
40	王冶梅	水仙図	清		1幅	紙本墨画	136.7 × 34.0	D086	
41	王冶梅	黄蜀葵図	清		1幅	紙本墨画	136.1 × 33.0	さ149	
42	衛鏄生	書 留別作五律	清	光緒8年(1882)	1幅	紙本墨書	178.2 × 35.7	266	①
43	衛鏄生	書 七絶	清	光緒8年(1882)	1幅	紙本墨書	139.2 × 34.1	268	①
44	衛鏄生	書 両聯	清	光緒8年(1882)	2幅	紙本墨書	(各)166.0 × 19.7	D078	①
45	衛鏄生	書 贈柳江女史詩	清	光緒8年(1882)	1幅	紙本墨書	27.9 × 19.6	乙021	①
46	衛鏄生	書 七絶	清	光緒8年(1882)	1幅	紙本墨書	139.4 × 34.1	乙054	
47	衛鏄生	書 贈柳江女史七絶	清		1幅	紙本墨書	150.7 × 40.6	267	
48	衛鏄生	書 七絶	清		1幅	紙本墨書	165.0 × 51.1	D008	
49	衛鏄生	書 両聯	清	光緒12年(1886)	2幅	紙本墨書	(各)136.8 × 16.6	D092	
50	王冶本	書 長歌	清	光緒11年(1885)	1幅	紙本墨書	150.9 × 42.7	D087	①
51	王仁爵	書 詠庭松五絶	清		1幅	紙本墨書	150.1 × 50.8	124	①
52	吳大澂	書 古語对句	清		2幅	紙本墨書	(各)133.9 × 32.0	248	牧
53	楊守敬	書 文心雕龍樂府中句	清		4幅	紙本墨書	(各)175.9 × 46.4	D535	田辺
54	吳昌碩	墨梅図	中華民國	5年(1916)	1幅	紙本墨画	140.8 × 48.0	264	
55	吳昌碩	書 萬々歳	中華民國	5年(1916)頃	1幅	紙本墨書	124.0 × 47.4	D146	
56	吳昌碩	花卉図(水仙/牡丹/石榴)	中華民國	8年(1919)	3幅	紙本墨画着色	(各)138.2 × 34.0	さ147	
57	胡鉄梅	白衣大士図	清		1幅	紙本墨画淡彩	89.5 × 33.8	254	
58	胡鉄梅	水閣聯吟図	清	光緒10年(1884)頃	1幅	紙本墨画淡彩	172.5 × 51.3	255	①
59	胡鉄梅	花鳥図	清	光緒10年(1884)	1幅	紙本着色	40.7 × 54.8	D156	①
60	胡鉄梅	花鳥図(錦繡春風/春江水暖)	清		2幅	紙本着色	(各)136.6 × 34.0	さ175	
61	胡鉄梅	紅梅白鶴図	清		1幅	紙本着色	152.4 × 43.1	さ182	
62	文廷式	書 七律	清		1幅	紙本墨書	156.5 × 51.8	D395	白岩
63	康有為	書 七絶	清		1幅	紙本墨書	106.8 × 35.7	D072	
64	池運永	水墨山水図	(朝鮮)		1幅	紙本墨画	153.9 × 40.8	76	

本稿では、特に野崎武吉郎（号、龍山）が活躍した明治時代に注目し、野崎家に伝わる記録資料や当時の出版物等の情報をもとに、中国書画收藏の経緯を3つの観点から紹介する⁵。

1. 清末書画人の来訪

瀬戸内海航路の要地である児島には、野崎武左衛門の時代から多くの文化人が集い、詩歌や書画の応酬も盛んに行われた。野崎家本家の公用日記である『売用日記』⁶は、来客の日時や対応した人物など、具体的な交流の様子を伝えている。明治前期の1880年代に入ると、清国からの文化人も次々と野崎家を訪れ、数多くの書画を遺した。ここでは、清時代末期の書画人の来訪時期と滞在中に制作された作品について紹介する。

1. 1. 衛鏄生

衛鏄生（生没年未詳）、名は寿金、頑鉄道人と号する。江蘇省常熟の出身で書に優れた⁷。『売用日記』第177号の明治15年（1882）10月31日の項に「午後七時清国人衛鏄生来タリ 直チニ遠勢楼ニ投宿ス 此之人ハ書家ナリ」とあり、11月6日に「衛鏄生氏帰途セラル」までの約一週間、この地に滞在している。

11月1日の項には、

午後六時ヨリ御主人様ヲ初メ橋本青江 高市彩濱 田邊氏 野崎四郎氏 五猿翁何レモ遠勢楼へ投宿之衛鏄生ヲ訪ハル

と記され、当家の主人である野崎武吉郎とともに、文人画家の橋本青江⁸とその門人、野崎家の理事を務めた田辺為三郎（号、碧堂）⁹ら関係者¹⁰が揃って、衛鏄生を訪問したことがわかる。翌々日の11月3日には、衛鏄生を招いて野崎家の表座敷で酒宴が開かれ、続く4日には別れの宴が催されるなど、来泊書画人と日本の文化人たちの交流の様子が、日毎に記録されている点も興味深い。

⁵ 3つの観点の収蔵経緯に相当する作品について、表1の備考欄に①②③と記した。

⁶ 売用日記は桐生館日記とも呼称される野崎家本家の公用日記である。家令または執事の地位ある人物によって毎日記録されており、主人の動静、来客の様子、商売の様子、金銭の出入などが判明する。天保11年（1840）の5月より大正9年（1920）7月に至る約80年間の日記である（『備前児島野崎家の研究—ナイカイ塩業株式会社成立史—』参照）

⁷ 衛鏄生については、次の文献を参考にした。

王宝平『清代中日学術交流の研究』（汲古書院、2005）

王宝平「明治前期に来日した文人たち」（中谷伸生編著『東アジアの文人世界と野呂介石』 関西大学東西学術研究所、2009）

⁸ 橋本青江（1828—98）は、幕末から明治時代の大阪で活躍した女性の文人画家。画を岡田半江に、書を篠崎小竹に学んだ。武吉郎の娘・於達（号、柳江 1871—1927）に画を教えるなど、野崎家と親交の深い人物である。

⁹ 田辺為三郎（1864—1931）は、浅口郡長尾村（現在の倉敷市玉島長尾）出身で、野崎家とは親戚関係にある。野崎家の筆頭理事として、武吉郎の貴族院議員活動をよく補佐し、塩業発展にも尽力した。碧堂の号で山水画をよくし、漢詩集を出版するなど、文人としての活動でも知られる。明治31年（1898）岡山県から衆議院議員選挙に立候補、当選し、明治35年（1902）まで議員活動を展開した。明治40年（1907）には日清汽船会社を創立、取締役就任するなど、実業家としても活躍した。

¹⁰ 「五猿翁」は、野崎武左衛門から武吉郎の時代にかけて67年間にわたり、野崎家に仕えた西井多吉（1815—99）の号。

表1の目録No.42～45は、作品の款記や『書画什器等目録』¹¹の記録から、滞在時の作と確認できる。掛軸のほか、六曲一双の押絵貼屏風や、多くの未表装作品も収蔵されている。加えて、No.5、12などの箱や包布に鑑識を記しており、中国書画の鑑定にも応じていたと考えられる。



図2 衛鏗生の押絵貼屏風（野崎家旧宅 向座敷での展示風景）

1. 2. 王治梅

王治梅（生没年未詳）、名は寅。金陵（現在の江蘇省南京市）の出身で、太平天国の動乱のため江南各地を転々とした後、上海で活動した。明治前期に日本を訪れ、当時の文化人たちの称賛を浴びたことで知られる。近年は、積極的な出版活動の面でも注目されている¹²。

『売用日記』第177号の記録から、明治16年（1883）2月22日に「遠勢楼古谷吟蔵宅¹³へ投宿」し、4月9日に「岡山エ向帰途セリ」と記されるまで一カ月余りの期間、逗留したことがわかる。

表1のNo.26、27、29～35は、滞在中の作である。中でも、No.33《四季山水図》（12幅対）は、画業の集大成と言える力作である。

王治梅の動向については、呉孟晋氏の「野崎家における王治梅の画業」（本誌(1)～(21)頁掲載）に詳しい。

¹¹ 『書画什器等目録』は、野崎家に伝わる収蔵品について、作品名・作者・寸法などの基本情報や受入れ時のいきさつなどを記載した台帳資料。

¹² 王治梅については、次の文献を参考にした。

注7 王宝平『清代中日学術交流の研究』、王宝平「明治前期に来日した文人たち」

西上実「王治梅と森琴石—近代文人画家と銅版出版事業の関わりについて」（『中国近代絵画と日本』展図録 京都国立博物館、2012）

¹³ 『岡山県児島郡案内誌』（児島郡案内誌編纂會、1923）の出身者名鑑「玉屋旅館主 古谷吟蔵君」の紹介に「同家は三代八十餘年同業を営む。君の代に至りて漸次規模を拡大し、今や郡内一流旅館として一般の信用厚し」とある。来舶書画人の宿泊先として度々記される「玉屋」、「遠勢楼」は古谷氏経営の旅館であろう。

1. 3. 胡鉄梅

胡鉄梅（1848－99）、名は璋。王冶梅と並び、清時代末期を代表する来舶画人の一人。安徽省桐城出身で、山水、花鳥、人物すべてをよくした。明治前期に来日し、京阪神や名古屋、山陰、北陸を訪れ、各地の文化人と交流した¹⁴。

『売用日記』第179号の明治17年（1884）8月11日の項には「玉屋へ投宿之胡鐵梅来リ」とあり、表1のNo.58《水閣聯吟図》、No.59《花鳥図》は、款記の内容から¹⁵、何れも来訪時の作であることがわかる。掛軸のほか、12面の《花鳥図冊》や扇子、未表装の墨画なども収蔵されている。



図3 胡鉄梅《花鳥図》



図4 胡鉄梅《花鳥図冊》第12面

上記の3名に続き、『売用日記』第180号の明治18年（1885）8月20日の項には、浙江省出身の王冶本（号、黍園）の来訪記録、第182号の明治21年（1888）3月4日、5日の項には、その弟の王汝修（号、仁爵）に関する記述がみられ、表1のNo.50、51の掛軸が収蔵されるなど、記録資料との照合により、来訪時期や制作の経緯をうかがい知ることのできる作品は、ほかにも多く存在する。

作者の来訪時に制作された作品は、野崎家での文化交流を今に伝える貴重な事例と言えるだろう。

2. 旧蔵者からの寄贈

次に、野崎武吉郎と旧蔵者との交流により、寄贈を受けた作品がある。『書画什器等目録』の記録、関係者からの添え状等により、作品の来歴や旧蔵者との関係を知ることができる。

¹⁴ 胡鉄梅については、次の文献を参考にした。

鶴田武良「羅雪谷と胡鉄梅—来舶画人研究—」（『美術研究』第324号、1983）

注12『中国近代絵画と日本』展図録

¹⁵ 《水閣聯吟図》には「野崎先生大雅清属」、《花鳥図》には「柳江女子清賞」（柳江は、武吉郎の娘・於達の号）とあり、ともに「於琴浦」（野崎家周辺の地域を指す）と記されている。

2. 1. 藤田伝三郎

山口県萩市出身の藤田伝三郎（1841－1912）は、建設業、紡績業、鉄道業など多方面の企業活動を展開し、関西の政商・財閥として成長した藤田組の創立者である。岡山県でも、明治17年（1884）に児島湾開墾事業を出願するが、関係市町村や周辺住民からの激しい反対運動を受けた。その和解調停に尽力したのが、野崎武吉郎と田辺為三郎である。干拓事業が実施された岡山市南区には、現在も「藤田」の地名が残る。

表1のNo.1（伝）夏珪《春景山水図》は、その時の謝礼として贈られた品の一つである¹⁶。

2. 2. 手島知徳

手島知徳（1859－1907）は鳥取県日野郡の出身で、野崎家とは親戚関係にある。帝国議会開設に伴い、上京した武吉郎を補佐し、塩業家として活躍するとともに、麴町区五番町に構えられた野崎家東京邸の執事をつとめた。表千家の直門として著書を遺すほどの教養人でもある。

表1のNo.16戴礼《花卉図》は、手島の遺愛の品として、長男の知健から寄贈されている¹⁷。



図5（伝）夏珪《春景山水図》



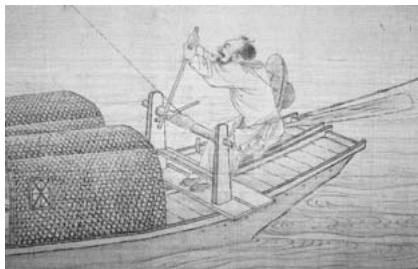
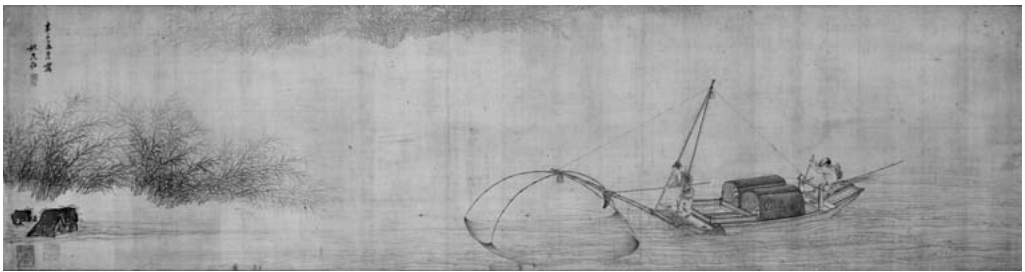
図6 戴礼《花卉図》

¹⁶ 『書画什器等目録』の備考欄に「藤田傳三郎氏兒島湾開墾ノ許可ヲ得ユ事ニ着手セントシ沿海ノ村ヨリ物議起リ縣當局モ困却ノ際 松堅院様仲裁ノ勞ヲ取ラレ其謝礼トシテ到来ス」と記されている。（松堅院は、野崎武吉郎の法名）藤田伝三郎からの目録には「一 宋夏珪 松竹梅瀧山水図（中略）傳來高野山三寶院旧什」とある。

¹⁷ 作品とともに、明治40年（1907）12月11日付の手島知健からの添え状が伝わる。

3. 羅振玉収蔵品の購入

明治44年（1911）の辛亥革命後、清時代末期の学者・羅振玉（1866－1940）は、家族や弟子の王国維らを引き連れ、大量の文物を携えて日本へと避難した。表1のNo.7魯得之《墨竹図》の題簽や、『書画什器等目録』の記録¹⁸により、大阪の出版社・美術商の博文堂を介して羅振玉から購入した作品が収蔵されていることは、平成27年（2015）「近代の岡山と東アジア」の報告でも触れたが、収蔵時期は不明であった。ところがその数か月後、京都市立芸術大学芸術資料館の収蔵品展¹⁹に出品された小林和作の模写《漁夫図巻（姚允在）》から、野崎家に伝わる姚允在《漁船図巻》がその原本であり、明治44年（1911）7月に京都市立絵画専門学校で開かれた、羅振玉の収蔵品による「支那画展」に出品されていたこともわかった。



（上）図7 姚允在《漁船図巻》、
（下）図8 姚允在《漁船図巻》部分、図9 小林和作 模写《漁夫図巻》部分

「支那画展」は、京都市立美術工芸学校及び同絵画専門学校の校友会誌である『美』をはじめ複数の雑誌で紹介され、『支那名画選』と題する画集も芸艸堂から出版された。また、学生による模写制作が行われ、小林和作や入江波光らによる模写は、現在も後身である京都市立芸術大学の芸術資料館に収蔵されている。この「支那画展」の内容について、最も詳細な『美』第3巻第2号「芸術界彙報」の記事から目録を作成し（表2）、雑誌や画集への図版掲載の有無、芸術資料館に収蔵されている模写作品の制作者、現在の収蔵先等の情報を整理した。

¹⁸ 魯得之《墨竹図》の備考欄に「支那人羅ヨリ大阪油谷博文堂ノ取次ニテ購求ス」とある。

¹⁹ 「東洋画－模写の世界」（2015年5月23日－6月28日）模写作品の名称は、展覧会目録による。小林和作の模写制作年である明治44年（1911）に注目し『売用日記』を調査したところ、12月25日の項に「大阪博文堂主人（骨董商）迨暇堂へ来ル」との記述を確認できた。

表2 羅振玉收藏「支那画展」陳列品目録 (1911年7月15日 於：京都市立絵画専門学校)

No.	作者	作品名	時代	形状	複写制作者	備考 (○は『支那名画選』図版掲載作品)
第一室(宋、元、明の書画)						
1	孟玉潤	枇杷山鳥図	元	掛物		
2	姚雲東(姚綬)	墨竹図	明	掛物		
3	文徵明	送別図	明	掛物	入江波光	○ 『美』第3巻第4号に図版掲載
4	文徵明	墨竹図	明	掛物		
5	陸治	雲山図	明	掛物		○ 雪山図として掲載、大和文華館蔵(羅振玉鑑蔵印)
6	仇英・陸治 合作	美人双陸図	明	掛物		○ 『美』第3巻第3号にも図版掲載、森谷南人子の絵専卒業制作「麗艶」に影響
7	仇英	臨唐人聽琴図	明	掛物	入江波光	○ 『美』第3巻第5号にも図版掲載、京都国立博物館蔵(上野コレクション)
8	馬守真	蘭図	明	掛物		
9	陳孔彰(陳嘉言)	花鳥図	明	掛物		
10	陳眉公(陳繼儒)	瀟湘夜雨図	明	掛物		
11	宋石門(宋旭)	山水図	明	掛物		○
12	石道人	山水図	明	掛物		
13	朱之蕃	呉竹図	明	掛物		
14	沈用賓(沈観)	山水図	明	掛物		
15	璩東海	雪山図	明	掛物		○
16	文嘉	山水図	明	掛物	入江波光	○
17	項子京(項元汴)	山水図	明	掛物		
18	項子京(項元汴)	仿雲林枯木竹石図	明	掛物		
19	文五 ※文五峯(文伯仁)	傲黄鶴山樵筆山水図	明	掛物		○
20	董其昌	山水図	明	掛物		
21	頂聖謨※項聖謨	山水図	明	掛物		
22	李唐	田家嫁娶図巻	宋	卷子		京都国立博物館蔵(上野コレクション)
23	沈元田 ※沈石田(沈周)	風樹画卷	明	卷子		
24	姚允在	漁夫図巻	明	卷子	小林和作	野崎家塩業歴史館蔵
25	陳白陽(陳淳)	書画合巻	明	卷子		
26	楊文聰	山水図巻	明	卷子		○
27	李流芳	書画合巻	明	卷子		
28	程嘉燧	山水長巻	明	卷子		○
第二室(明、清の書画)						
29	呉梅村(呉偉業)	鈎雪図	清	掛物		○
30	張君度(張宏)	山水図	清	掛物		
31	陳老蓮(陳洪綬)	行醜図	清	掛物		○
32	卞文瑜	山水図	清	掛物		○
33	楊子鶴(楊晋)	山水図	清	掛物		○

34	王武	花鳥図	清	掛物	
35	王石谷(王翬)	山水図	清	掛物	○ No.35・36の何れの図版かは不明
36	王石谷(王翬)	山水図	清	掛物	○ No.35・36の何れの図版かは不明
37	王麓台(王原祁)	山水図	清	掛物	
38	呉墨井(呉歴)	山居図	清	掛物	○
39	呉墨井(呉歴)	山水図	清	掛物	○
40	查士標	仿梅華道人山木図	※山水図	清 掛物	○
41	鮑楷	翎毛花卉図	清	掛物	○
42	高澹人(高士奇)	山水図	清	掛物	
43	虞沆 ※虞沅	翎毛図	清	掛物	○
44	馬扶曦 ※馬扶義(馬元馭)	花卉図	清	掛物	
45	金冬心(金農)	画蔬	清	掛物	○
46	鄭板橋	蘭図	清	掛物	
47	張南華(張鵬翀)	枯木竹石図	清	掛物	
48	方士庶	群山秋色図	清	掛物	
49	羅飯牛(羅牧)	山水図	清	掛物	
50	文後山(文鼎)	山水図	清	掛物	小林和作 ○
51	張墨岑(張宗蒼)	山水図	清	掛物	
52	羅兩峯(羅聘)	花鳥図	清	掛物	
53	李穀村	山水図	清	掛物	
54	王岡齡(王廷魁)	臨文衡山山水図	清	掛物	
55	董其昌	書画合巻	明	卷子	
56	孫雲居	百花図巻	明	卷子	
57	陸萬言、徐光啓等	書画冊	明	冊	○
58	陳堯峯(陳煥)	山水図冊	明	冊	
59	文壽承(文彭)	宜興十景図巻	明	卷子	
60	張君度(張宏)	行旅図巻	清	卷子	
61	頂東井 ※項東井(項奎)	山水図巻	清	卷子	
62	蟬南田 ※憚南田(憚寿平)	花塙夕陽図巻	清	卷子	京都国立博物館蔵(上野コレクション)
63	純桂巖 ※張桂巖(張賜寧)	山水図巻	清?	卷子	
第三室(清の書画)					
64	張月川(張洽)	山水図	清	掛物	
65	王蓬心(王宸)	山水図	清	掛物	○
66	方蘭坻(方薰)	花卉図	清	掛物	○ 「新篁寒菊図」京都国立博物館蔵(上野コレクション)
67	尹西村(尹錫)	菴叢図	清	掛物	○

68	尹西村 (尹錫)	山水図	清	掛物	
69	張壺山 (張恂)	山水図	清	掛物	○ 泉屋博古館蔵 (内藤湖南旧蔵)
70	王三錫	山水図	清	掛物	○
71	邊壽民	茶器図	清	掛物	
72	黄小松 (黄易)	明湖放舟図	清	掛物	
73	黄小松 (黄易)	山水図	清	掛物	
74	錢叔美 (錢杜)	香林禪誦	清	掛物	
75	錢叔美 (錢杜)	煮茶図	清	掛物	○
76	錢叔美 (錢杜)	墨梅図	清	掛物	○
77	康石舟 (康濤)	停琴聽阮筆 ※停琴聽阮図	清	掛物	
78	王椒畦 (王学浩)	山水図	清	掛物	
79	湯雨生 (湯貽汾)	山水図	清	掛物	○
80	朱青立 (朱昂之)	秋花園	清	掛物	○ 黒川古文化研究所蔵 ただし、羅振玉旧蔵に関する付属情報はない
81	改七薌 (改琦)	墨梅図	清	掛物	
82	湯祿名	白描子女図	清	掛物	○ 「仕女図」京都国立博物館蔵 (富岡益太郎氏寄贈)
83	丁南羽 (丁雲鵬)	孔子習礼図	清	掛物	
84	顧洛	林下美人図	清	掛物	柴田晩葉 ○
85	無名氏	西廂図	清	掛物	榊原雨村 ○ 筆者不詳 (或伝唐寅筆) として掲載
86	馬荃	松鼠図	清	掛物	
87	馬荃	花卉図	清	掛物	
88	郎世寧	封侯図	清	掛物	
89	文南雲 (文点)	山水図巻	清	卷子	○
90	羅飯牛 (羅牧)	山水図巻	清	卷子	
91	王蓬心 (王宸)	浯溪図巻	清	卷子	
92	戴醇士 (戴熙)	山水図巻	清	卷子	
93	湯雨生 (湯貽汾)	山水図巻	清	卷子	○
94	王東莊 (王昱)	山水図巻	清	卷子	
95	張船山 (張問陶)	墨梅図巻	清	卷子	
96	清人	書画冊	清	冊	
97	清人 (王石谷 [王翬] 賈鉉、唐岱等)	画冊	清	冊	
98	石濤	山水画冊	清	冊	○
99	王時敏	山水画冊	清	冊	
100	張大風 (張風)	人物画冊	清	冊	
101	邵僧彌 ※邵僧彌 (邵弥)	画冊	清	冊	
102	李鱣	花卉画冊	清	冊	

103	程諶菴(程蘊)	山水画冊	清 冊	
104	方士庶	山水粉本冊	清 冊	○ 大和文華館蔵
105	王三錫	山水画冊	清 冊	
106	張庚	山水画冊	清 冊	
107	董邦達	山水画冊	清 冊	
108	張墨岑(張宗蒼)	山水画冊	清 冊	
109	閻竹賓	画冊	清 冊	
110	漸江(弘仁)	山水画冊	清 冊	○ 大和文華館蔵 冊 現在はこの図も方士庶
111	王玳果	墨蘭画冊	清 冊	
112	禹之鼎	鍾馗図冊	清 冊	松浦朗 ○
第四室(明、清の書)				
113	文徵明	楷書養生論	明 掛物	
114	錢牧齋(錢謙益)	行書詩	清 掛物	
115	康熙帝	御筆詩	清 掛物	
116	何美門	楷書	清 掛物	
117	王夢樓※王夢樓(王文治)	行書詩	清 掛物	
118	王夢樓※王夢樓(王文治)	行書	清 掛物	
119	錢大昕	行書	清 掛物	
120	鄧頑白(鄧石如)	篆書	清 掛物	
121	劉石菴(劉墉)	行書	清 掛物	
122	祝允明	離騷經卷	明 卷子	
123	祝允明	草書金粟山藏經卷 (紙背有唐写經字)	明 卷子	
124	沈石田(沈周)	行書落花詩	明 不詳	
125	玉履吉 ※王履吉(王寵)	行書石湖八絶句	明 不詳	
126	玉履吉 ※王履吉(王寵)	草書北山移文	明 不詳	
127	徐有貞、李夢陽、王錫爵、 羅倫、三稜登 ※王稜登、 祝允明、張弼 ※張弼、 彭年、張淵、丘濬 等	書冊	明 冊	
128	董其昌	臨各家書卷	明 卷子	
129	黄道周	楷書卷	明 卷子	
130	朱竹垞(朱彝尊)	詩冊	清 冊	
131	姜西溟(姜宸英)	臨王書	清 不詳	
132	鉄梅庵(鉄保)	脩石路記	清 (冊)	黒川古文化研究所蔵(羅振玉鑑蔵印)

『美』第3巻第2号(芸艸堂、1911年8月1日発行) 7-8頁「芸術界彙報」の記事をもとに作成

羅振玉収蔵の中国絵画が、京都市立絵画専門学校において展示され、模写制作が行われた影響について、興味深い作例がある。岡山県出身で当時在学中だった森谷南人子²⁰の卒業制作《麗艷》大正2年（1913）である。京都市立芸術大学芸術資料館の松尾芳樹氏が「画想の契機となった作品がある。美工・絵専両校校友会誌『美』の明治四四年九月号に掲載された「美人双陸図」で、仇英と陸治の合作という明画であるが、この画中の人物は《麗艷》と極めて類似しており、当時絵専の三年生であった南人子が、この中国画に強い興味を持ったことが想像できる²¹と指摘するように、卓を囲む人物の構図、椅子の形状、二人で一つの椅子に座るポーズなど、南人子が《美人双陸図》を参考にしたことは明らかである²²。



(左) 図10 森谷南人子《麗艷》（京都市立芸術大学芸術資料館蔵）



(右) 図11 仇英・陸治合作《美人双陸図》（『支那名画選』掲載図版 表2のNo.6）

²⁰ 森谷南人子（1889－1981）は、小田郡大井村（現在の笠岡市小平井）出身の日本画家。本名は利喜雄。京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校に学び、竹内栖鳳らの指導を受けた。

²¹ 松尾芳樹「森谷南人子《麗艷》解説」（『京都の日本画100年』展図録 うらわ美術館、2003）

²² 図10《麗艷》は『森谷南人子のすべて』展図録（笠岡市立竹喬美術館、2004）より転載。なお図11《美人双陸図》のカラー図版が、次のオークションカタログに掲載されている。CHRISTIE'S Hong Kong *The Fushoutang Collection Important Classical Chinese Paintings From Japan*, Hong Kong, 2000.

笠岡市立竹喬美術館の上菫四郎氏による「この時期の南人子の中国絵画全般への強い関心を認めなければいけない」²³との考察に基づき、同館収蔵の南人子資料を調査させていただいたところ、大正初期のスケッチ帖に、中国絵画を参考にしたとみられる人物図が度々描かれ、その手本となる版本や図版などを所蔵していたことも確認できた。

羅振玉が日本に持ち込んだ中国書画の内容と、それを目にした京都の画学生たちへの影響についても、引続き注目したい。

おわりに

ここまで、野崎家における近代の中国書画コレクション形成について、作者の来訪時に制作された作品、旧蔵者との交流による寄贈品、羅振玉からの購入品という3つの観点から紹介した。

最後に、中国書画収蔵の過程で、岡山県ゆかりの人物が果たした役割について述べたい²⁴。

1. 及び2. に既出の田辺為三郎は、野崎家理事、政治家、実業家として多方面の人物と交流し、詩書画に通じた教養人として収蔵に寄与した。表1のNo.5文震孟、No.53楊守敬の書は、田辺の紹介により、野崎家に収蔵されている。

次に、岡山県出身の白岩龍平（号、子雲）²⁵は、野崎家の学資援助により上海の日清貿易研究所に学んだ。田辺とともに、大東汽船会社、湖南汽船会社、日清汽船会社を創立し、中国への航路を整備した。近衛篤磨らと東亜同文会の創立に関与するなど、日中親善にも尽力している。表1のNo.21林則徐の書は、白岩から中国土産として寄贈されている。また、江西省出身の官僚・文廷式が明治33年（1900）に来日した際には、多くの場面に同行している。文廷式は野崎家の東京邸を訪問しており、No.62の掛軸のほか、扇子や未表装の書などが収蔵されている。

同じく岡山県出身の牧巻次郎（号、放浪）²⁶は、閑谷巒で西毅一（号、薇山）²⁷から教育を受け、明治26年（1893）上海の東和時報記者として中国に渡った。明治30年（1897）に帰国し閑谷巒で教鞭をとるが、翌年には朝日新聞通信員として再び中国に赴き、朝日新聞上海特派員、北京特派員をつとめた。閑谷、上海時代を通して、白岩とも親交が深い。3. の羅振玉収蔵品の購入に関して、明治44年（1911）12月、博文堂の野崎家来訪の際に紹介状を郵送している。

岡山県は、岸田吟香、内山完造²⁸など近代の日中交流に貢献した人物の出身地でもある。西毅一の再興した閑谷学校（閑谷巒）からは、若く優秀な人材が中国に渡った。その西毅一の娘・艶子

²³ 上菫四郎「再考—森谷南人子」（『森谷南人子のすべて』展図録 笠岡市立竹喬美術館、2004）

²⁴ 表1 野崎家塩業歴史館収蔵 中国書画目録（掛軸）の備考欄に、収蔵に関わった人物名を記した。

²⁵ 白岩龍平（1864—1931）は、吉野郡宮本村（現在の美作市宮本）出身の実業家。

²⁶ 牧巻次郎（1867—1915）は、東北条郡塔中村（現在の津山市加茂町）出身の新聞人。

²⁷ 西毅一（1843—1904）は、岡山市出身の政治家・教育者。閑谷学校の再興に尽力した。

²⁸ 内山完造（1885—1959）は、後月郡芳井村沢岡（現在の井原市芳井町）出身。上海内山書店の店主。魯迅や郭沫若ら、多くの文学者と交流した。

は、野崎武吉郎の媒酌により、白岩龍平に嫁いでいる。地域に根ざした人脈がとりもつ縁が、野崎家コレクションの特色であり、魅力でもある。

岡山大学では、平成27年（2015）の「近代の岡山と東アジア」から、翌年の「もう一つの『学都』岡山の物語」²⁹、このたびの「児島、野崎家に集った『人』と『書画』」の三回にわたり、近代の「東アジアネットワーク」に着目したシンポジウムが継続的に開催されている。研究報告や意見交換を通して、県内の郷土史研究者、他の地域の東アジア史・経済産業史・東洋書画の専門家、さらには中国や台湾からの報告者の方々とも交流できる貴重な機会であった。野崎家や閑谷学校など岡山ゆかりのテーマに沿って、地域や分野を越えた研究協力が進み、瀬戸内をとりまく豊かな文化交流が、現代へと繋がることを願いたい。

（追記）

二度の特別企画展の後も、継続的な作品調査をお許しいただいた公益財団法人竜王会館理事長の野崎泰彦氏、作品撮影など調査の諸事において、御便宜、御協力を賜りました野崎家塩業歴史館、京都市立芸術大学芸術資料館、笠岡市立竹喬美術館の各位に厚く御礼申し上げます。また、本稿に関わる調査及び資料作成について、御協力と御助言をいただきました京都市立芸術大学の竹浪遠氏、京都国立博物館の呉孟普氏に深く感謝いたします。

<主要参考文献>

ナイカイ塩業株式会社社史編纂委員会編『備前児島野崎家の研究—ナイカイ塩業株式会社成立史—』（山陽新聞社、1987）

岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』（山陽新聞社、1994）

岡山県立美術館学芸課編『塩田王野崎家 ゆかりの人と作品』（公益財団法人竜王会館、2012）

岡山県立美術館学芸課編『塩田王野崎家 個性集う地方サロン』（公益財団法人竜王会館、2013）

²⁹ 「もう一つの『学都』岡山の物語—閑谷学校を中心とする近代東アジアネットワークの研究—」（2016年3月26日）閑谷巒や日清貿易研究所をテーマに、東アジアネットワークに関する研究報告が行われた。（『文化共生学研究』第16号で特集）